

名家書簡披展：連載その一

雅俗の会

<https://doi.org/10.15017/4755948>

出版情報：雅俗. 1, pp. 235-263, 1994-02-28. 雅俗の会
バージョン：
権利関係：



名家書簡披展

△連載 その一▽

雅俗の会

『江戸時代文学誌』第七号・八号において、「続々名家手簡」と題し中野三敏氏御所蔵の手紙を翻字し写真とともに掲載したが、本誌においても引き続き中野氏御所蔵の書簡の翻字及び写真を順次掲載することとした。

卷子あるいは冊子としてまとめられているものについては一括し、その配列に従う。今号に掲載した書簡のうち、九から十四までは「頼家一門及菅茶山書簡」と題して一巻に軸装されたもの、また十五から十八までは切断されてはいるものの、もともと一巻にまとめられていたことがわかるものである。

その他、翻字に関する原則は、以下の凡例に従う。

凡例

- 一、原則として原簡に忠実に翻字した。
 - 一、尚々書きは原簡での位置に関わらず、本文の後に続けた。
 - 一、略字、俗字、異体字などはおおむね通行の字体に改めた。
 - 一、虫喰いなどで判読不能の箇所は「□」で示して註記した。
 - 一、花押は（ ）で示した。
 - 一、註は適宜ほどこした。
- 原簡の翻字及び写真の掲載を許可された中野三敏氏に深く感謝申し上げます。

一 三宅佩章

本月朔日之貴書相達致拜見候先以盛暑之節弥御家内御清勝被成御揃珍重之御義不過之奉存候乍慮外御母義様へ可然御心得被成可被下候先頃者久々滞留仕候て石庵様へ寛々得尊意其上御袋様彼是と御懇情ニ被成被下辱奉存候此等之趣可然可申上頼入存候拙者事甲府ニも七八日逗留仕候於道中落馬之痛有之罷帰候ても全癒ニてハ無之候處諸用繁多日々屋敷へ罷出候躰故早々以書中も不申達候此度も先艸々如此御座候追々委曲可申述候恐惶謹言

六月十八日

三宅才二郎様³

御報

三宅惣十郎(花押)

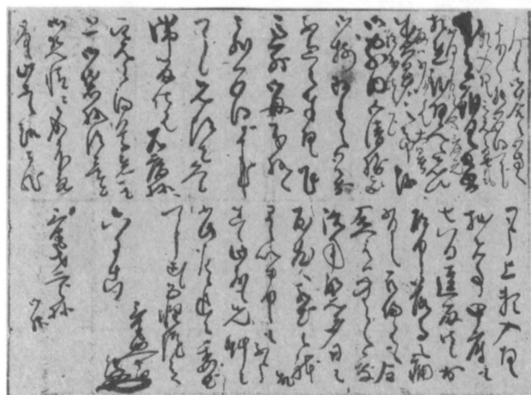
尚々御出合之御方へよほく能御心得可被下候頼入存候其元之暑氣如何御座候哉爰元雨ハ少ク候て大暑難義仕候以上

註1 三宅石庵。懷德堂初代学主。名正名、字実父、通称新次

郎。石庵・万年と号す。寛文五年正月十九日生、享保十五年七月十六日没、六十六歳。

2 三宅佩章。水戸藩儒。名維祺。惣十郎は通称。石庵・観瀾の弟。

3 三宅春楼。懷德堂三代学主。名正誼、字子和。才二郎は通称。石庵の子。正徳二年十一月十五日生、天明二年十月九日没、七十一歳。



(305×402mm)

二 二日坊

蝶夢¹様

いせ

二日坊²

短尺之義被仰下甚恥入申候折節紙計幸便延引故其儘進上候追而書直し可差上候以上

五月中旬

燕の心に落ぬ菖蒲哉

先日麻父子上京一葉甚珍吟仕候猶々折々玉句承度候以上

註1 俳人。京都の人。別号五升庵、泊庵など。法号幻阿弥陀

仏。宋屋門。のち芭蕉復興運動の中心的存在となる。享

保十七年生、寛政七年十二月二十四日没、六十四歳。

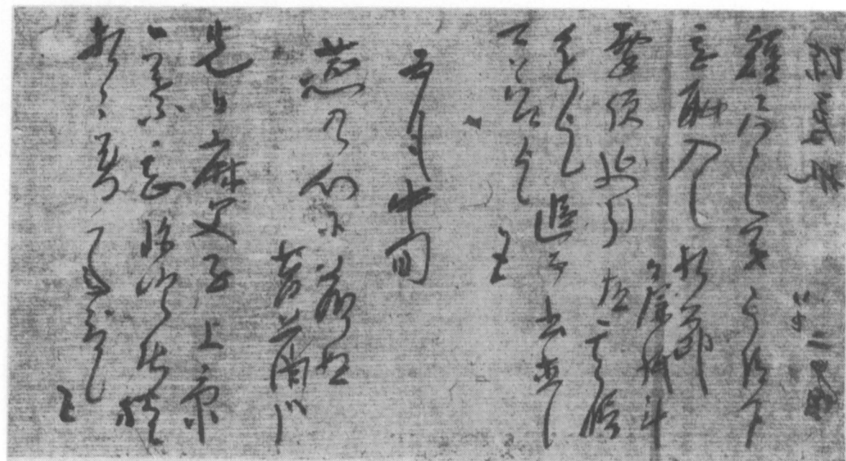
2 俳人。伊勢の人。姓菊池、名宗雨、楊立と称す。二日坊

はその号。のち、帰旧坊、帰旧法子と号す。正徳元年生、

安永四年五月二十三日没、六十五歳。

3 俳人。富山の人。別号^{（うづ）}庵。中川乙由門。安永三年没

（ノ）庵麻父一回忌追善『ノ集』の刊年が安永四年であることに拠る推定）。



(152×282mm)

三 三宅春楼 (一)

貴間(マヘ)忝拜見仕候如仰新曆之御吉慶尚不可有尽期申納候御
 渾家弥御安寧御超歳被成候由珍重奉存候當方無異事加年
 仕候去夏御門人中相應之御方御養子被成候由今年者不圖
 御上京當所へも御立寄も可被成委曲之御紙面珍重之御義
 承知仕候早々年始御祝詞辱為御禮答如斯御座候尚期永日
 之時候恐惶謹言

二月廿三日

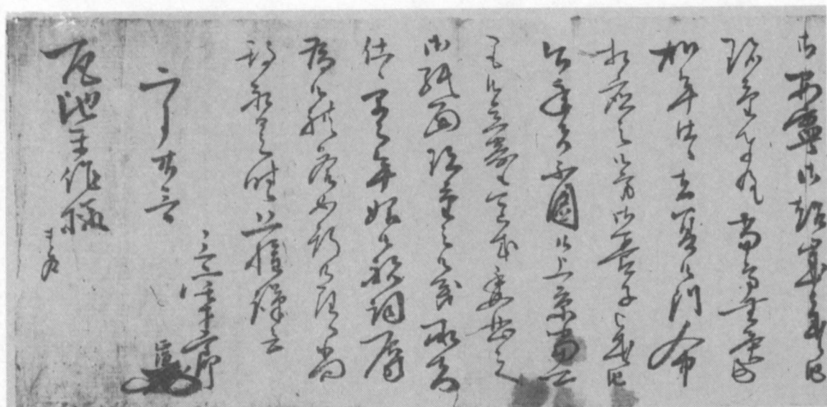
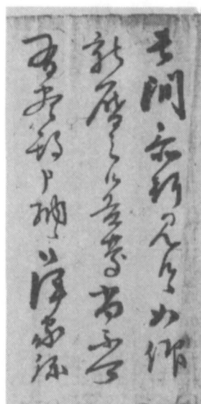
瓦池平作様

貴答

三宅才二郎

正誼 (花押)

註1 本号一註3参照。



(160×458mm)

四 三宅春楼 (二)

貴簡致薰誦候如仰秋暑尚強御座候處愈御壯健被成御勤候
由珍愛奉存候当方無異事罷在候随而為八朔御祝儀金子二
百疋被懸御意每々御丁寧之段不浅辱祝納仕候尚期後音之
時候恐惶謹言

三宅才二郎¹

八月十九日

正誼(花押)

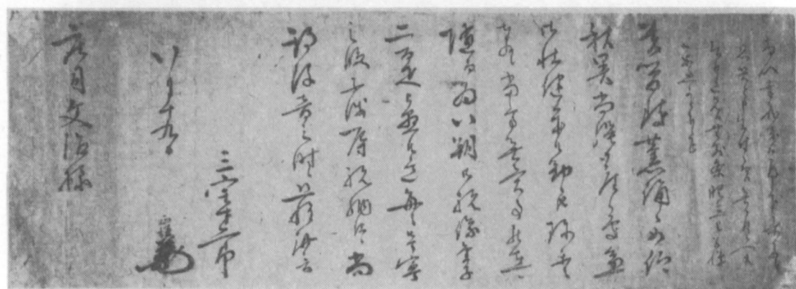
庄司文治様

尚以幸藏義御尋被下忝奉存候息災と申生付二而ハ無御
座候へ共今日迄先ハ無別条肥立申候乍憚御安慮可被下
候以上

註1 本号一註3参照。

2 三宅幸藏。名如幾。幸藏は通称。三宅春楼の子。春楼没

後、中井竹山が懷德堂学主となつたが、幸藏は竹山の処
遇に不平を訴え、弟の永藏とともに懷德堂を出、讃岐に
到つたという(西村時彦『懷德堂考』)。



(157×441mm)

五 古賀精里

昨日石川大ニ心配ニ而兎肉被贈候處其マズキ事猿肉より
も甚ク候乍然珍物故御すそ分ケ申候小兒之時種痘の薬と
て喫候得共忘却所々江頼候儀後悔仕候牧野より近内可差
送と申儀ニ而候所ケ様ニ而は棄無之候以上

十二月十九日

尚々乍末筆先日は御光駕被下辱奉存候御帰路寒夜御困
りと奉存候翠軒1歌書物語仕候度便不慥候間又々取ニ参
上可申候

鈴木岩次郎様2

古賀弥助3

註1 立原翠軒。水戸藩儒。名万、字伯時、通称甚五郎。号東

里、のち翠軒。延享元年生文政六年三月十四日没、八十

歳。

2 鈴木白藤。書物奉行。藏書家。名成恭、字士敬、号白藤。

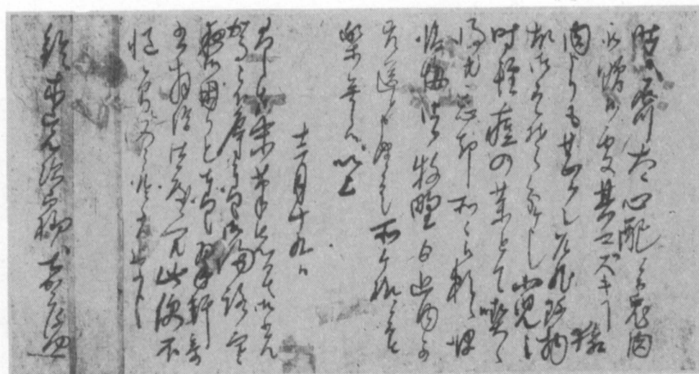
岩次郎は通称。明和四年九月十六日生、嘉永四年十二月

六日没、八十五歳（森潤一郎『紅葉山文庫と書物奉行』）。

3 漢学者。佐賀の人。本姓劉。名樸。字淳風。精里と号す。

弥助は通称。寛延三年生、文化十四年五月三日没、六十

八歳。



(161×308mm)

六 中林竹洞

御紙面被下忝拝見仕候如仰寒氣甚敷相成候處益御清福被成御座目出度奉賀候然ハ其後ハ御無沙汰仕候承候得ハ去年より御大病御わつらい被成候由御窺不申御無沙汰仕候私も去年元日より大病わつらい申以今元之如相成不申筆取候事甚大義ニて万事廢絶殿方へも御無沙汰仕候扱又先年娘清淑¹印御彫刻被下殊ニ数御苦勞ニ預り見事御出来忝奉存候去年春二月頃右御礼之為私病中故前年認有之愚面老枚清淑画及愚書相添差上申候所相届不申候由扱、御氣毒驚入申候御地へ商ひ仕候紅屋五兵衛と申者ニ相託申候定て相届申候事と存候所御紙面之趣相違不申候よしニ御座候故此度ハ土佐御屋敷福永氏²差出し申候私画も病中不出来候得共聊御礼申上度如此ニ御座候清淑代筆御免可被下候恐惶頓首

尚々渾て風流相休養生方一二候へハ御無沙汰仕候御免可被下候

十二月十二日

中林竹洞³

壬生志摩之助様⁴

註1 中林竹洞の三女。名邦。清淑はその号。竹洞に画を学び、

花卉を能くした。文政十二年生（兼松蘆門『竹洞と梅逸』）。

2 福永六郎か。壬生水石著「全環録」（嘉永元年三月二十

三日より五月二十五日までの土佐有馬往復紀行）中、京

都の記事に「抵国邸、訪中平又八、不在、訪福永六郎、

而達官書焉」と見える。

3 南画家。名古屋の人。後、京都に住す。名成昌。字伯明。

通称大助。竹洞はその号。他に融斎、冲澹など。安永五

年生、嘉永六年三月二十日没、七十六歳。

4 篆刻家。土佐藩士。名弘文・長庚・戚・成・樸・璞など。

字無名・子文・仲礼・叔治など。号水石、水石堂など。

通称志摩介・志摩・八十助。篆刻を高田春塘・春木胥山・

三雲仙嘯に学び、書画にも長じた。寛政二年生、明治四

年十月二十二日没、八十二歳。

※ 水田紀久「壬生水石資料」（『日本篆刻史論考』日本書誌

学大系43）

七 篠崎小竹

貴札忝拝見仕候時下嚴寒御揃益御佳適被成御座奉寿候然
は帗幅澤山之御遣し拙作可呈由被仰下任来命此度揮染返
上仕候寄題惡作御咲覧可被下候俾長平¹へも申付為認申候
為御謝儀金百疋被送下忝拝納仕候烏洲²へ返書一角御序ニ
御届申候清風集一冊被贈下此亦忝奉謝候歳暮短景多事草
々御答迄如此猶来春目出度可申承候恐々不具

篠崎長左衛門⁴

臘月六日

神岡玄俊⁵様

尚々晴齋兄よりも来書此節御出府と奉察候此亦御序ニ
宣布御傳意奉冀候以上

註1 篠崎竹陰。儒者。本姓加藤氏。名概、字公概。長平は通

称。江戸の人。初め古賀侗庵門、後に篠崎小竹門。小竹

の養子となり、その次女を娶る。安政五年八月没（『大坂

訪碑録』）。

2 金井烏洲。画家。春木南湖門。名時敏、後に泰、通称彦

兵衛また左忠太、字子修また林学。上野の人。『清風集

初編』（註3参照）に詩を寄せる。寛政八年生、安政四年

正月十四日没、六十二歳。

3 『清風集初編』一冊。天保九年二月序刊。神岡竹嶼編。

竹嶼醫屋を築いた際に諸家から贈られた詩歌を集めたも
の。

4 篠崎小竹。儒者。本姓加藤氏。名弼、字承弼。長左衛門

は通称。大坂の人。九歳で篠崎三島に入門、のち養子と

なる。天明元年四月十四日生、嘉永四年五月八日没、七

十一歳。

5 神岡竹嶼。医家。玄俊はその医号。上野の人（篠崎小竹

『交友郷里姓名』）。

6 『交友郷里姓名』に「江戸 前田晴齋 江戸浜町山伏井

方角大竹ニ寓」とある人物か。

此乃余所見信也
 書之於石以傳之
 世者其毋得而私之
 收漢山先生一紙他日
 吾子何如矣今全押
 梁正平子一字無異
 口說無憑一併世
 付為信以為汝等
 上之云云亦好也
 西云一角之字
 一冊之字
 小册之字

(157 × 462mm)

[illegible]

八 帆足杏雨

貴簡拝讀仕候如仰日、炎暑難凌候處愈御安健被相涉候旨奉恭祝候隨而老拙無恙送日月候乍憚御放慮可被下候誠ニ先達而ハ御枉駕被成下且又種々盛饌御惠投被下御厚情之段奉拜謝候拙境ハ御存之通僻地故何之供給之所不任心底汗背之仕合ニ奉存候其砌御嘱ニ相成觀音大師尊像是非益ニハ御用被成度御思召之由ニ而則揮毫仕候眼病後ハケ様之画ハ何方にも相断候へハ御老母別而御懇望之趣に而相認候讀之義ハ木庵禪師²之偈有之候ニ付併是も御落掌御一咲可被下候外ニ種々御依頼之画ハ此炎蒸ニ付益後寛々相認可申候此段御老母様へ被仰達上可然御傳語奉希上候先ハ為報迄勿々頓首

舊曆七月五日

帆足庸平⁴

池邊田邨様

尚御借之都名所圖繪之事未タ書籍類虫干不仕候其内土用干仕候節穿鑿御返璧可仕候將又宿之老婆^江種々御惠投之佳品早速下達之處御深切之段殊之外難有狩り候御

厚禮申上呉候様申出候尚又同婆より御母公様^江宣敷様申出候

註1 豊後国大分郡戸次市村。白杵藩領。大分川の右岸に位置する。現在の大南町の一部。

2 木庵性瑠。渡来僧。黄檗山万福寺二代住持。書を能くし、隠元・即非とともに黄檗三筆と称される。万曆三十九年生、貞享元年一月二十日没、七十四歳。

3 明治五年十二月三日、太陰曆を太陽曆に改め、六年一日とする。従って本書簡は明治六年以降に書かれたものであることがわかる。

4 帆足杏雨。南画家。名遠。庸平は通称。画を田能村竹田に、経学を広瀬淡窓に学ぶ。文化七年四月九日生、明治十七年新曆六月九日没、七十五歳。

5 『都名所図会』。安永九年刊（六卷六冊）のものと、「拾遺」と角書きした天明七年刊（四卷五冊）のものとがある。いずれも秋里離島著、竹原信繁画。

九 頼春水

手島伊助殿

無事

春水²

大坂着岸より之紙面達披見先以十五日上船其後十八日瀬戸。出帆直ニ坂越順々ニ大坂着候由伏見ニテハ万四郎。旅宿へ待受と申程ニ仕合能候段万四郎よりも申来り此元ニテ安悦ニ候何様来書之通江戸参着ハ御先ニ成可申候此節大井川之来書且留守へ平三郎参申聞候ハ大井川ニ四日もつかへ候様ニ聞候段内方咄ニ候寺川父子も無事帰宅早速面談大坂ニテ急成事之由咄ニ候留守ニハ皆々無事ニ候此節此7元婚儀⁷廿一日ニ道具遣し廿二日ニ引越直ニ婚儀相調居舎も至而宜敷六一。大嬉しかりニ候扱右一件近々万四郎へ申遣候テ承知可有之候道具取集メ日々之事直次一働キ行届候事ニ而善左ハ目録なと書キもらひ候幸右衛門も煩買物たのミ候竹原より参候者有之此兩人六一流の早決断ニて直ニ数日直切シボリ一兩日ニ即謝意なと申事ニ候長刀ハ惣仕立直し木地椀ヲため塗紋所七ツ付候ケ様之事ニ而其餘察し可給候道具遣候夜ハ格別も無之候之所引越之

タハ多人数入込ワン／＼申様ニ候久太郎¹⁰存外ワガものニして大小世話いたし一ト助かりニ候権次郎¹¹ハ廿日ニ儀右衛門¹²同船罷帰候諸事無滞相済候段於其元安心可給候当夜ハ庄助¹⁴も見候何角取持ニてよろしく候先ハ留守之無事可申進如此ニ候内方ハ廿一日前度々参り候三五斗ノ時も有之又兩人かり□□¹⁵時も有之候廿日より今日迄ハ三人共ニ詰切りニ候進物も被申置候哉厚キ事ニ候

四月廿四日¹⁶

註1 春水の学僕（頼桃三郎『詩人の手紙』一二四頁）。

2 頼春水。広島藩儒。名惟完、字千秋、通称弥太郎、春水

はその号。延享三年六月三十日生、文化十三年二月十九日没、七十二歳。

3 現在広島県沼隈郡内。

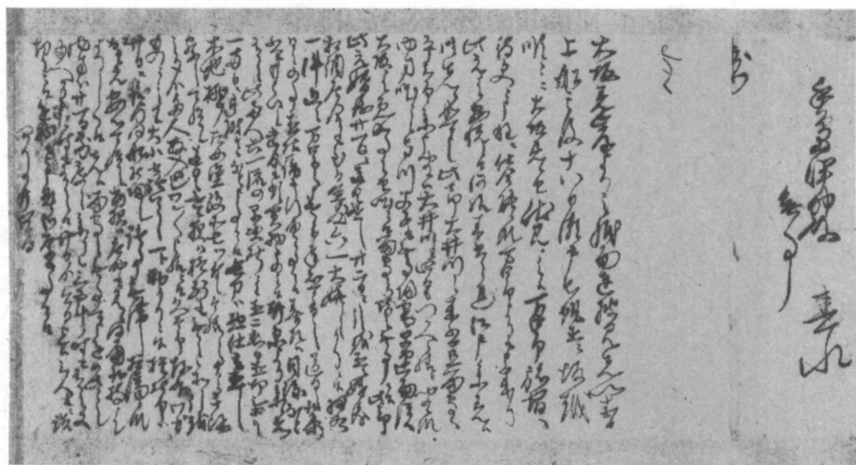
4 赤穂領の港。現在赤穂市内。

5 頼杏坪。広島藩儒。名惟柔、字千棋、别号春草堂。万四

郎は通称。春水弟。宝暦六年七月生、天保五年七月二十日没、七十九歳。

6 『春水日記』に出る寺川庄助父子か。

- 7 春水娘三穂（十改め）と広島藩士進藤吉之助（のち、彦助）の婚儀。『春水日記』文化五年四月二十一日条「：御用縁談被仰出多賀客」、『梅麗日記』同年同日条「道具七つ過遣す、手伝とまり十人」とある。
- 8 梶山六一。「梶山は春水腹心の塾生である」（『詩人の手紙』一二五頁）。
- 9 現在の広島県竹原市。春水の実家がある。
- 10 頼山陽。名襄、字千成、別号三十六峰外史。春水の長子。安永九年十二月二十七日生、天保三年九月二十三日没、五十三歳。
- 11 頼景讓。権次郎は通称。春水弟春風の嫡子。
- 12 石井豊洲。名威臣、字儀卿。儀右衛門は通称。春水門。
- 13 「（文化五年）四月 廿一日 豊洲・景讓同伴、竹原より」（『頼山陽全伝』二二六頁）。
- 14 前出寺川庄助。註6参照。
- 15 虫損。
- 16 註7より文化五年。



(119×249mm)

十 頼春風

増田屋

甚兵衛様

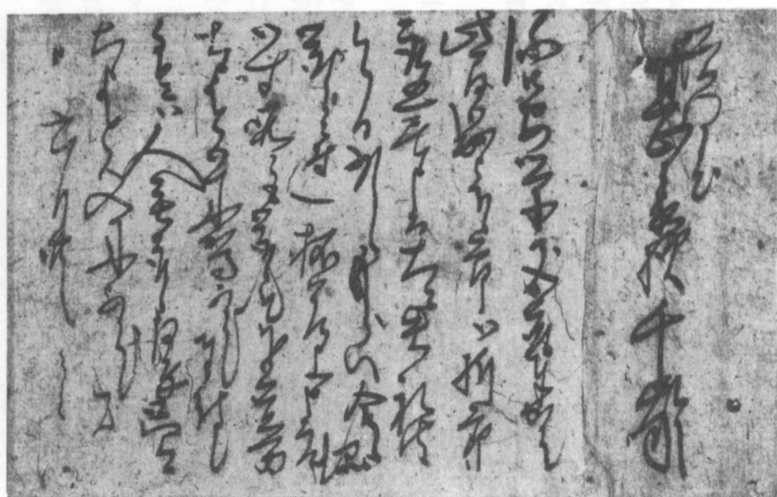
千齡¹

弥御案栄被成御座奉賀候此間御出被下候節ハ折節取込居
申候而大ニ失礼仕候今日少々もらい合之品御座候ニ付一
杯差上申度候御寸暇ニも御座候ハ、乍御足劳ちよと御来
駕可被下候奉待候自是ハ人無御座候何卒只今ちよと御入
来可被下候以上

六月廿日

註1 頼春風。広島藩儒医。名惟彊。千齡は字。春水の弟。宝

暦三年生、文政八年九月十二日没、七十三歳。



(144×228mm)

十一 頼杏坪

几下

杏翁₂

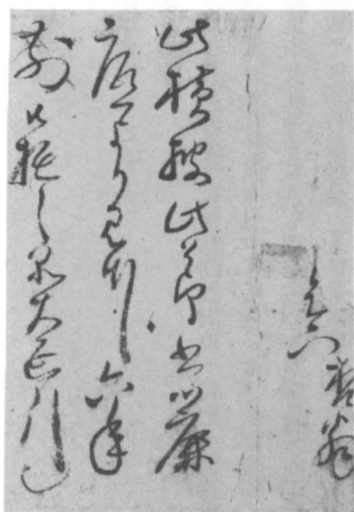
此横披此節書簾底より見出し候六年前被托候品大延引候
しかし遅く成候故詩ハ其節よりも少しハ好く成候方と存
候呵、

八月廿四日

一昨夜より兩夜ニ書終り候

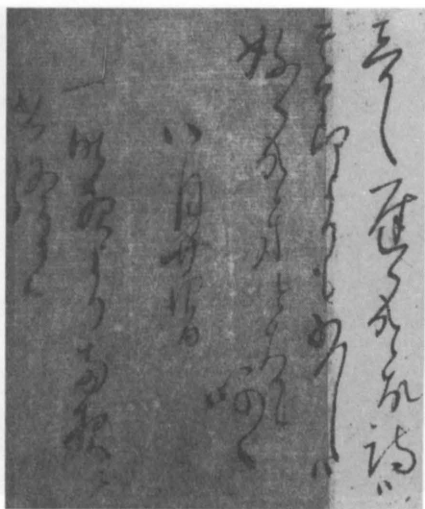
註1 原簡破れ。

2 頼杏坪。本号九の註5参照。



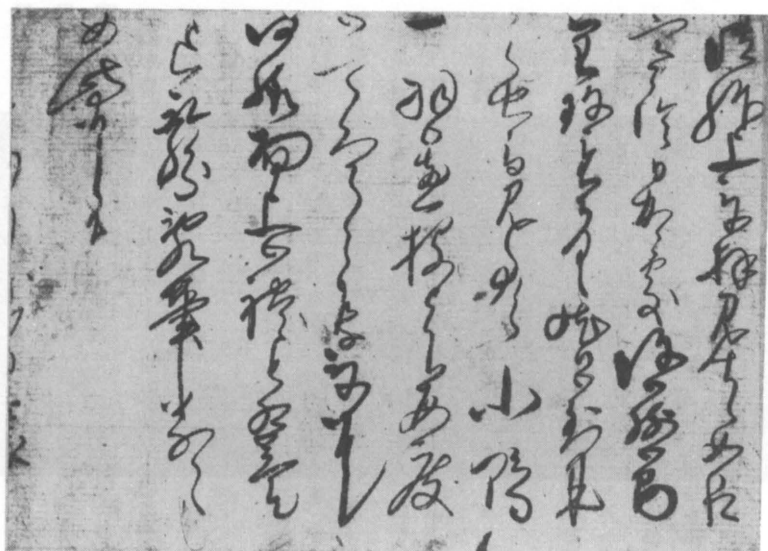
(152×226mm)

十二 頼山陽₁



御紙上忝拝見仕候如仰寒冷日加候處弥御揃御安全珍重奉
存候然ハ御到来之由ニ而見事く小鴨一羽御恵投被下毎
度御丁寧之御義忝御座候何様面上御禮も右御答迄取紛乱
筆草々如此御座候以上

註1 原簡末尾に日付と「襄」の字の右半分が見える(写真参
照)ことから推定。



(159×228mm)

十三 頼聿庵

新春之御慶無際限申納候各位倍御安泰被遊御迎春重畳目
出度御義奉存候當院無恙加年仕候乍憚御安意被遊可被下
候万縷深春可申上候恐惶謹言

頼餘一¹ (花押)

二月五日

尾藤高藏²様

侍史

再啓

筆端豎敬

叔母様宜敷被仰上可被成候此元ハ今以餘寒難退候其御地
如何随分御保護奉懸祈候今度私方舊門人久保勇司⁴と申者
学問修行仕度其御地へ参候御聞及も被成候哉暫茶山翁塾⁵
中ニ居候北條讓四郎⁶近來阿部公之召⁷ニ而其御地へ参候同
人も此北條懇意ニ候而それを目あてに参候事ニ御座候時
々御伺可申上候間御目通も仰付可被下候さ候ハ、於同人
感戴不尠と奉存候乍序御尋申上候

二洲先生御著稱謂私言素餐筆餘¹⁰静寄草餘¹¹之類御上木被成

候哉後便御聞せ被下候ハ、忝奉存候定而御詩文可被為富
候御筆示奉希候私共ハ浅学鄙陋依然たる事ニ御座候御憐
察可被下候今日ハ書状数多相認困眼乱筆ニ相成申候幸恕
到早春尽早速呈書可仕候之所雅俗取紛何角と遷延失敬
ニ打過申候御海有可被成下候

註1 頼聿庵。名元協、通称餘一。山陽の長男。祖父春水の嫡

子となる。広島藩儒。寛政十三年二月十日生、安政四年
八月三十日没、五十七歳。

2 尾藤水竹。名積高、通称高藏。二洲の三男。江戸の儒者。

享和二年二月十日生、安政元年十二月十四日没、五十三
歳。

3 水竹の母梅月と山陽の母梅颯は姉妹。

4 未詳。森鷗外『北條霞亭』所掲、文政五年五月朔付霞亭
宛付茶山書簡中に「某氏勇司」とあるのがそれか。鷗外
は「是は茶山が霞亭の許へ遣つたのに、霞亭を訪はずに
直に聖堂に入つたと云つてある。想ふに備後を出でて江
戸に遊学した一諸生であらう。」と記している。『升堂記』
には見えない。

5 備後国神辺にあつた廉塾。

6 北條霞亭。名は讓、通称讓四郎。福山藩儒。安永九年九
月五日生、文政六年八月十七日没、四十四歳。

7 備後福山藩主。阿部正精。安永三年十二月二十四日生、
文政九年六月二十日没、五十三歳。霞亭が阿部公に召さ
れたのは文政二年、江戸に向かったのは、文政四年五月
のこと。

8 尾藤二洲。名は孝肇、通称良佐、静寄軒などと号す。幕
府儒官。延享四年十月八日生、文化十年十二月四日没、
六十七歳。

9 『稱謂私言』は文化八年刊。

10 『素餐筆餘』は『素餐録』のことか。成立は寛政三年、
出版は天保七年になる。

11 『静寄草餘』は『静寄余筆』のことか。成立は天明七年、
出版は弘化三年になる。

※ 白木豊『尾藤二洲伝』参照。

十四 菅茶山

ゑちこや¹またせ候而いる事斗申上候此文件²へ御出なほし
てもらひ度本書ハ此方へ御かへしさて足下一通を書いて見
せてよき處へ御見せ可被下候御世話之品いまた届不申候
月溪³貴公外ハとゞき候御取かへになり候品俵屋⁴ニ而御請
取可被下候以上

良太様

太中⁵

村上君中山あたり御次宜奉願上候

伴よしの紀行出来候覧御うつさせ御こし可被下候筆耕
料御わたし可被下候

註1 越後屋太右衛門か。

2 伴蒿蹊。名は資芳、関田子などと号す。国学者。享保十
八年十月一日生、文化三年七月二十五日没、七十四歳。

3 松村月溪。呉春ともいう。画家。寛保二年生、文化八年
七月十七日没、七十歳。

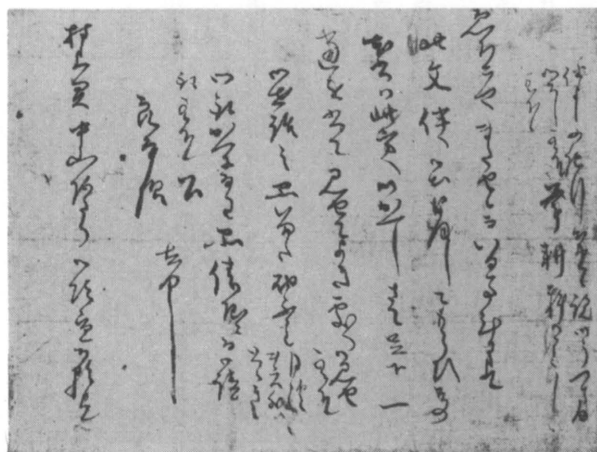
4 俵屋喜兵衛。京都三条にあつた紙屋。京都滞在の折の茶

山の定宿。

5 菅茶山。名は晋帥、通称太中など。寛延元年二月二日生、

文政十年八月十三日没、八十歳。

※ 富士川英郎『菅茶山』参照。



(146×195mm)

十五 柴野栗山（一）

邦彦¹再拜冷氣弥清福被成御揃奉敬賀候私義無事罷在候
胸病ハ同前御座候さして動憤なり不申候へ共氣味わるく
御座候御公方様此節御隙分御座候哉承度奉存候岡崎老人²
ニもふさた致申し候別条無之御義安心仕候国喪事³恐入候
此節過蜜中陰其御地諸事跋蜜之事と御察候此元も今日迄
五日之禁音御座候。

一惣体国喪堂上方御服諒闇の日数ハ如何程ニ而御座候乍
御せわちよと御報附可被下候且繼體ハ何レの宮ニ候哉御
即位なとハいつ頃候哉劍璽ハ如何候哉彼是承度奉存候乍
御せわ奉頼候。

一□種⁴図考⁵清書之方ハ大方のき申候草稿の方ハ出候而ハ
却而不宜候故引コメ置申候此上淨写本二部被遣被下候様
ニ仕度候此書御印行被成可然奉存候此元も二十人ほとハ
入銀ノ人可有之候尤百疋も之入銀御座候右セわいたし候
者御座候入銀の方へ見セ本ニいたし度候一部御下し可被
下候右本及七種ノ図考料物十二月中旬迄ニ上可申旨承知
仕候どうも左様ハ取計いたしかたく御座候私ニ而かわせ

ニいたし暮迄二三両上候様ニ先取計申候尚又とくと御勘
定申し幸便に上候弥あつまり申候ハ、四両も相成り可申
候私方ニ而御取かへ可仕候所当春已来費用不手廻し不任
心底候十二月晦かきりニ三両ハ宿にて御取可被下候

一壺碑一枚取出申候随分石本ニ而御座候尤すりハ上すり
ニは無之候価ニ歩式朱ニ御座候御取被成ましく哉承度候
一佐理卿ノ書牘模本出申候尤先達而其元も有之候逸勢ニ
而も可有之と申候本也翻刻いたしたかり申候者御座候弥
橘氏之書ニ可有之哉今一往吟味いたし度候近便上可申候
御考可被下候

一後藤弥兵衛も中風いたし候旨御座候尤至極かろき事大
方行直り申候由御座候

一此間蒔田喜兵衛¹⁰と申伊勢ノ人見へ申候大分書ヲ解申候
虞法ヲヨク書申候足下御様子御伝申上候近來頻ニ御文通
被成候由申候好事人也

一薩州山大ヤケ之由略々承り申候其旨御聞被成と奉存候
十月初ノ灰ハ右之灰と奉存候¹²

一友次郎より願書状申候返事延引いたし可申候宜御伝可
被下候其後此元相更義無之候時候御自重專一ニ奉存候万々

幸便可申上候令内人勿々恐惶頓首拜

邦彦拜

十一月十七日¹³

蒙齋賢兄¹⁴

尚々図南老人□□□候可然御傳可被下候さて俗冗こまり申候已上先日御頼申候内裡図及家廟古瓦古印定而御承知被下候半と奉存候
尚々私惣髮願も相済申候近日より立テ可申と奉存候此段高はしにも御傳可被下候

註1 柴野栗山。阿波藩儒、のち幕府奥儒者。名邦彦、通称彦助。元文元年生、文化四年十二月一日没、七十二歳。

2 尚々書きにみえる「図南老人」「高はし」から推して、

高橋宗直か。御厨子所預。若狭守と称し、号は図南、文

経先生。元禄十六年八月二十六日生、天明五年一月十四

日没、八十三歳。京都岡崎居住（天明二年版『平安人物

志』）。

3 後桃園天皇崩御。安永八年十一月九日。

4 「安永八年亥年 大目付け

一主上不予之処、御養生不被為叶、去九日被遊崩御ニ付、為伺御機嫌、明十四日惣出仕之事、（中略）一普請鳴物は、今日より来ル十七日迄、五日停止之事、右之通、可被相触候、十一月十三日」（『御触書天明集成』）

5 「安永八亥十二月

先帝崩御之処、御継体不被為在候ニ付、閑院宮息男祐宮御方為御養子、御踐祚被為候、十二月」（『御触書天明集成』）

6 原簡破れ。

7 藤貞幹著『七種図考』写七卷三冊のことか。安永七年の自序を持つ自筆稿本が天理大学図書館に所蔵される。

8 宮城県多賀城碑のことか。天平宝字六年建立。

9 後藤芝山。高松藩儒。弥兵衛はその通称。名世鈞、字守中。享保六年生、天明二年四月三日没、六十二歳。栗山はその高弟。

10 蒔田必器。伊勢御師龍太夫の代官。初め喜兵衛、のち亀六と称する。元文四年生、享保元年十月十三日没、六十三歳。能書として知られる。

11 虞世南の書法。世南は南北朝から初唐の書家。

12 「十月朔日、夜より二日迄、灰、雪の如く降る。大隅国

桜島焼けたりしが、其の灰江戸迄も降りしといふ。」(『武

江年表』安永八年)

13 安永八年。栗山はこの年江戸に逗留中。

14 藤貞幹。京都の国学者。本姓藤原、字子冬、蒙斎はその

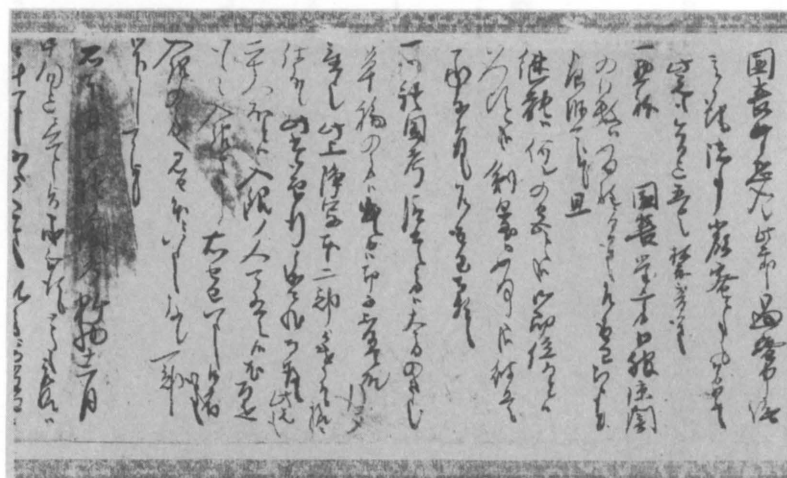
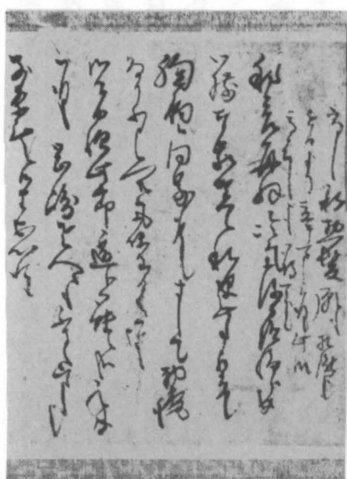
号。別号無仏斎・好古等。享保十七年六月二十三日生、

寛政九年八月十九日没、六十六歳。儒を後藤芝山・柴野

栗山に、儀式故実を高橋宗直に学ぶ。栗山や蒔田必器と

の交流については、『無仏斎手簡集』(『日本芸林叢書』

巻九所収)参照。



(150×955mm)

十六 柴野栗山（斷簡）（二）

一九成宮双鉤抄返申候是ほととの双鉤手際にて上木いたし候而もくるしかるましく候哉□□師帖抄返申候是ほとこの刻者ニほらせ候而も可然候哉よろしかるへくと思召候は、此方ニ而申付仕り可申奉存候とうも元本をのほし候事いたしかく御座候こまり申候とくと御考被下何卒思召被聞召候様ニ偏ニ奉頼候

一竹葉体。又々五十枚御取可被下候奉頼候毎度なから為煩候

一墨本方々へ相頼申候然所此節此元沢田文治³発行ニ而メツタニ古キ所ヲ世上ニヤカマシク申候故彼ノ声ニホユル族義之献⁴之にて無之候而ハ手跡ニ而無之様ニ覚候而子昂以下ノキかね申候漸少々のき申候水戸へ相頼申候而又々あの方ニ而せわいたさせ候候つもり御座候

一□石の事白河公世子⁶江助力いたさせ申候つもり御座候所右世子へ出入いたし候儒者去年中より彼世子へ疎遠になり候故急々取計出来不申候こまり申候事に御座候其外申上度事御座候へ共とかく把筆殊外牙病ニあたり候故早々

執筆期幸便候頓首拝令内人勿々拝以上

邦彦拝

六月廿六日

昨夜ハ大風雨御座候是ニ而少々ス、シクナリ候へハよく御座候哉

蒙齋賢兄

尚々芙蓉瘞鶴双鉤⁸何卒早々御かり可被下候奉頼候以上

註1 初唐の書家歐陽詢による九成宮醴泉銘を籠写したもの。

唐代楷書の典型で、その法帖が多い。

2 彦根藩儒龍草廬（寛政四年没、七十八歳）が創始し普及せしめた書体を竹葉体というが、そのことか。

3 沢田東江。江戸の儒学者、書家。文次は通称。名麟、字景瑞のち文竜、来禽堂等と号す。宝暦以降、明人の書跡に対して王羲之など古代の法帖を考究し、古法書と呼ばれる書風を確立した。享保十七年生、寛政八年六月十五日没、六十五歳。

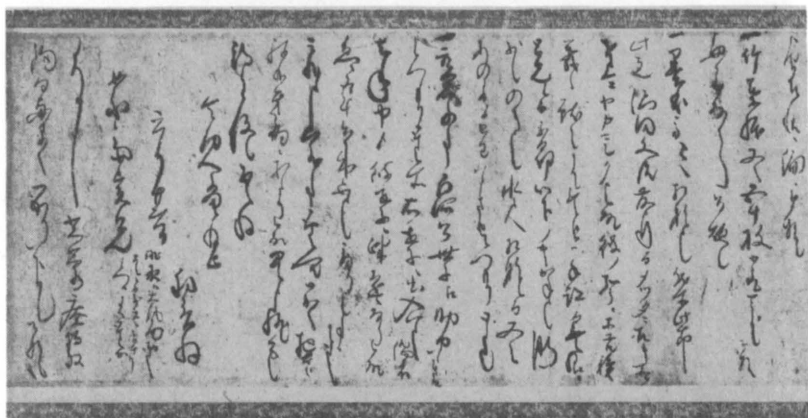
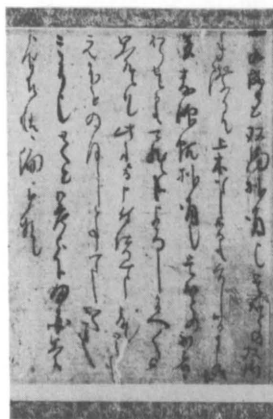
4 王羲之と王献之。東晋の書家、父子。

- 5 趙子昂。元の儒家、書名高く、その法帖『雪賦』（宝曆八年）、『詩帖』（同十三年）、『茶飲帖』（明和二年）、『憎蒼蠅賦帖』（安永七年）等は高美蓉の摸刻により上梓。水田紀久「高美蓉とその一派」（『日本篆刻史論考』所収）参照。

- 6 松平定信。田安宗武の第三子、安永三年三月白河藩主松平定邦の養子となり、天明三年十月襲封。

- 7 高美蓉。大島氏、名孟彪、字濡皮。書家で篆刻をよくした。栗山、蒙斎ともに親しかった（桃西河『座臥記』）。享保七年生、天明四年四月二十六日没、六十三歳。

- 8 瘞鶴銘のこと。梁の古碑、康熙中に修復（『輟耕錄』卷十四）、王羲之書など（宝暦四年刊『新增書籍目録』）その法帖が多数。



(151×436mm)

十七 小沢芦庵（一）

以手帑致啓上候逐日寒冷相募候処弥御安康可被成御勤珍重奉存候仰去十日卷頭御題ニ添候画三枚被下詠進可仕候旨被仰下候其節致他行候ニ付翌十一日為御断參殿御手前様へ可得貴意存候処御詰合無之ニ付西市正殿右御題御短冊ニ画返上御断申上候且又其節御月次御題被下置候は八今日詠進差上申候可然御取合可被下候又去十八日御手紙を以瑞鳥梅和歌写六折為御見被下則写取候はも今日返上仕候其日も他行仕候不能罷報候ニ付旁如斯御座候以上

十月廿一日

小澤蘆庵₂

今小路民部卿様³

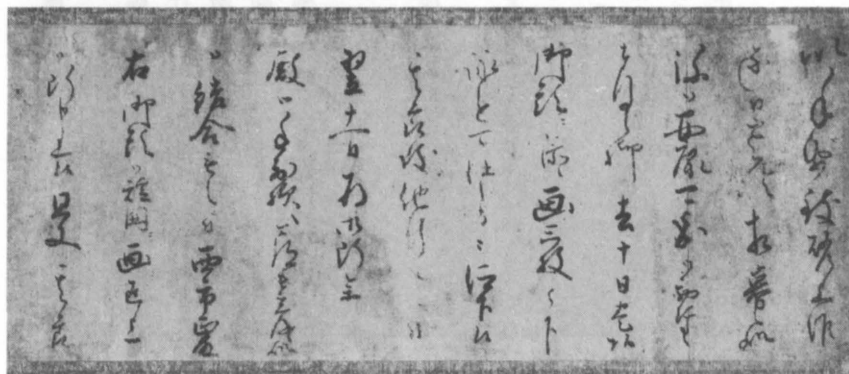
註1 妙法院の諸大夫松井永昌か。寛保二年五月二十八日生、

寛政十二年七月十三日没、五十九歳（『地下家伝』）。

2 歌人。享保八年生、享和元年七月十一日没、七十九歳

3 妙法院の坊官今小路行章。明和八年十月三日生、享和三

年七月十六日没、三十三歳（『地下家伝』）。



(158 × 820mm)



十八 小沢芦庵 (二)

以別紙得貴意候殘炎於今熾候処弥御安全被成御勤珍重奉
存候此間參殿仕候節不得貴意残念奉存候然者今日團扇¹
拝領仕上意之趣餘見難有以御恩風殘暑炎熱中無子細可相
凌相覚候早速御請參殿可仕義候へ共蒙御慈恩候儀故暫及
遅々貶分而宜御取合被下候様奉頼候仍以別紙御頼申上候
以上

七月廿一日

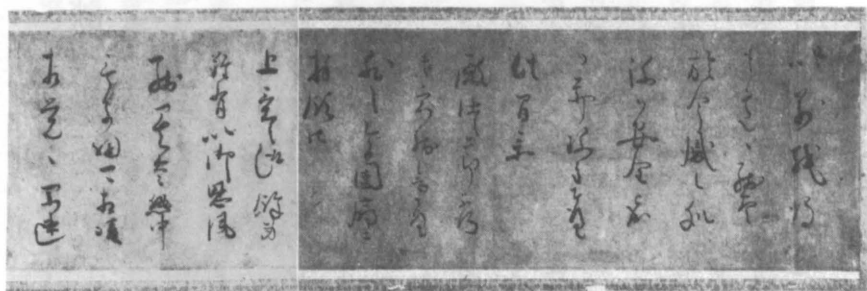
民部卿様²

蘆庵

註1 静嘉堂文庫藏自筆稿本『六帖詠草』卷二十三(秋六)に、
「いとあつき日宮よりはしてしのけとて團をたまへりし
に」として、

身に余るめくみの風に今よりはのこるあつきさもうち
わすれ南の歌を掲げる。あるいはこの折の作か。

2 今小路民部卿か。ただし他にも民部卿を名のる坊官は存
在する。



(142×858mm)

